

入門！多摩の遺跡たち

A Small Journey through the Archaeological Sites of Tama Area



表紙掲載出土品〔上段から〕
 縄文土器 深鉢（滑坂遺跡 八王子市教育委員会所蔵）
 尖頭器（前田耕地遺跡 東京都教育委員会所蔵）
 陶磁器類等（下宿内山遺跡 清瀬市郷土博物館所蔵）
 玉類（四軒在家遺跡 国立市教育委員会所蔵）
 土器類・石刀・耳栓（なすな原遺跡 町田市教育委員会所蔵）

入門！多摩の遺跡たち

日本の首都・東京の西半分を占める多摩地域。

23区・島嶼部と並ぶ「もう一つの東京」の地には、豊かな歴史を物語る遺跡が目白押し。

東京最古の旧石器、縄文の美、亡き長を護る埴輪、国府官人の姿、戦国城館の盛衰…

この展示は、そんな遺跡巡りの旅への入門編です。

多彩な出土品とともに多摩の歴史を辿る道のり、その第一歩を踏み出しましょう！

The Tama region, which makes up the western half of Japan's capital, Tokyo. Alongside the city's 23 central wards and its island districts, Tama is "another Tokyo" — a land filled with archaeological sites that tell a rich and fascinating story of the past.

Here you will encounter Tokyo's oldest Paleolithic stone tools; the beauty of the ancient Jomon era; haniwa clay figures from ancient burial mounds; the lives of officials who served at the ancient provincial capital; and the rise and fall of a Sengoku castle.

This exhibition is your introduction to a journey through these remarkable sites. With a wide variety of excavated artifacts as your guide, take the first step along the path of Tama's history!

会場レイアウトと順路



- 1 つちやづかこふん
土屋塚古墳 (P15)
- 2 しけんざけ
四軒在家遺跡 (P18)
- 3 したじゅくうちやま
下宿内山遺跡 (P26)
- 4 はちおうじじょうあと
八王子城跡 (P24)
- 5 むさしこくぶんじかんれん
武蔵国分寺関連遺跡 (P21)
- 6 あやべはら
綾部原遺跡 (P14)
- 7 むさしだい
武蔵台遺跡 (P5)
- 8 まえだこうち
前田耕地遺跡 (P8)
- 9 なめざか
滑坂遺跡 (P11)
- 10 なすなはら
なすな原遺跡 (P12)



約 35,000 年前

武蔵台遺跡

前田耕地遺跡



旧石器

草創期

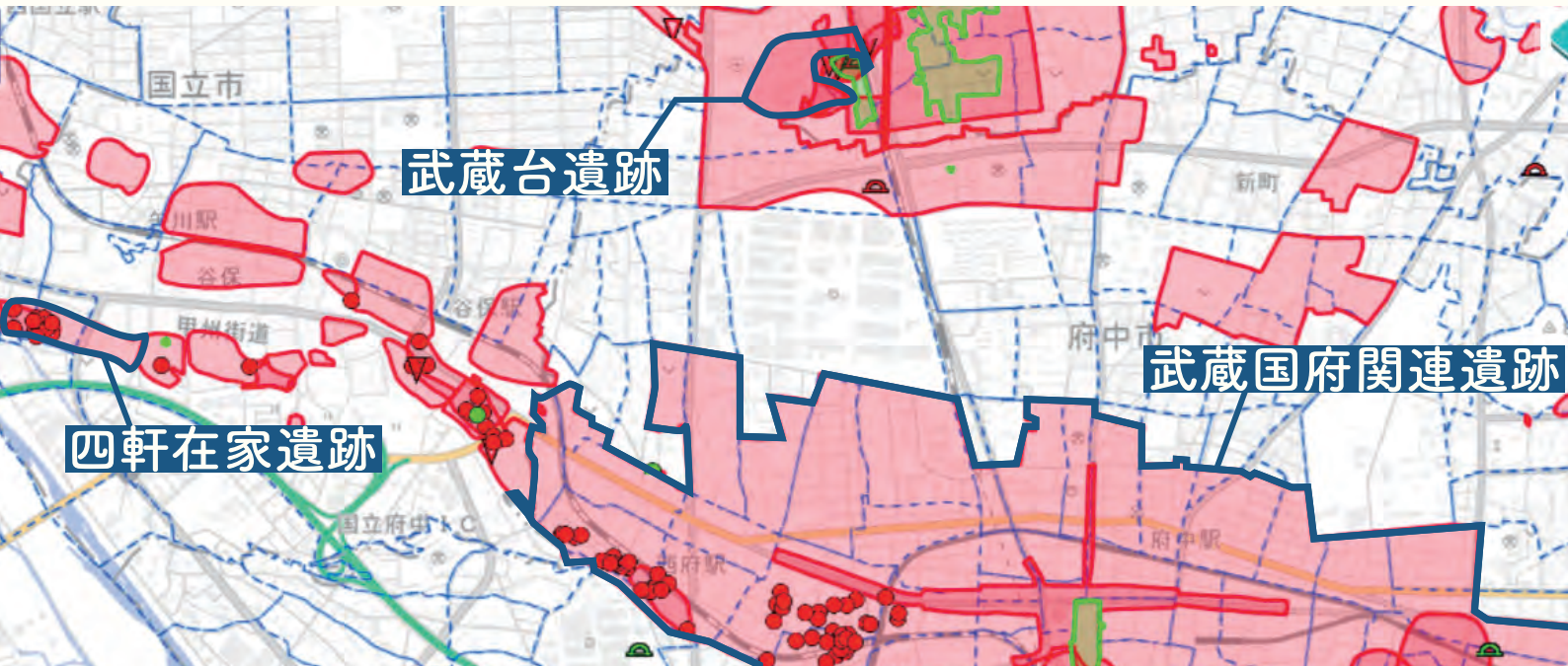
早期

15000 年前

12000 年前

10000 年前

多摩の遺跡はどこにある？



東京都遺跡地図 府中～国分寺駅周辺抜粋

ウェブサイト「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」(<https://tokyo-iseki.metro.tokyo.lg.jp/>)では、東京都にある**周知の埋蔵文化財包蔵地**の場所を地図上で見ることができます。ここに例として掲載したのは国分寺駅や府中駅の周辺の遺跡地図で、赤に着色された範囲が埋蔵文化財包蔵地です（緑は史跡の範囲）。このように、多摩地域には意外と身近なところに数多くの遺跡が存在しているのです。地図中には本展示でご紹介する四軒在家遺跡や武蔵国府関連遺跡、武蔵台遺跡も含まれています。

※掲載の図は 2026/3/10 アクセス時の状況

? 周知の埋蔵文化財包蔵地

埋蔵文化財とは文化財保護法で「土地に埋蔵されている文化財」を指す言葉で、一般的に「遺跡」と呼ばれているものに相当します。全国の各自治体では埋蔵文化財の埋もれている範囲を「周知の埋蔵文化財包蔵地」として、その場所を一般に公開しています。

「入門！多摩の遺跡たち」展示遺跡年表

下の年表には、本展で扱う遺跡がそれぞれの時代のものなのかが示されています。この年表では500年が概ね1cm弱で表されていますが、この換算だと最も古い武蔵台遺跡はページ内に収まりきりません。



プロオーグ

多摩の多は多彩の多

The Many Faces of Tama: A Journey through Its Diverse Past

多様な環境に 30,000 年以上にわたり人々の暮らしが連綿と続いてきた多摩地域。そこに残された遺跡たちにも、簡単に要約できるような共通点はありません。むしろその多様性こそが多摩地域の遺跡の最大の特徴といえるかもしれませぬ。そんな個性に富む遺跡たちをこの小さな展示室に散りばめました。

ささやかな多摩の遺跡巡りの旅を楽しんでいただければ幸いです。

For more than 30,000 years, people have lived in the Tama region of western Tokyo, adapting to its varied natural environments. Over this long span of time, they lived in many different settings and left behind a wide range of archaeological sites. These sites do not share a single defining feature that can be easily summarized. Each reflects a particular moment in time, a specific landscape, and a distinct way of life. It is this diversity—these many faces of the past—that most clearly characterizes the heritage of Tama. In this small gallery, we have brought together selected sites from across the region and across time. We invite you to explore them as stops along a journey through Tama's richly layered archaeological world. We hope you will enjoy this modest journey into the many stories of Tama.



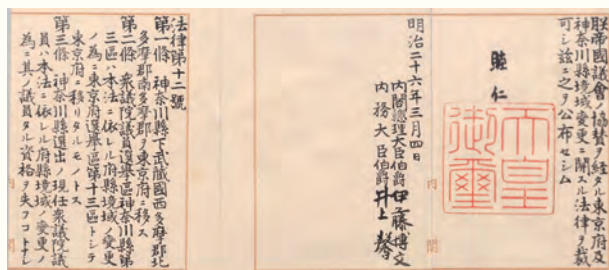
地域内の遺跡数 3,967 遺跡

東京都全体の遺跡数 6,657 遺跡の約 6 割を占める。
 ※ 2026/3/4 時点で東京都遺跡地図に登録されている埋蔵文化財包蔵地を集計。

多摩って何？

What is Tama?

東京都の本土部のうち23区以外を多摩地域と呼び、おおむね古代以降「多麻（磨）郡」とされた地域に相当します。江戸時代、幕領や藩領等が複雑に入り組んでいた当地域は、明治の廃藩置県により、現在の中野区・杉並区に相当する東多摩以外、神奈川県かんがつの管轄すいげんとなります。水源管理や自由民権運動への対応等を目的に1893（明治26年）年に東京府に移管されることで、東京の一部としての「多摩地域」が始まりました。現在は30の市町村がふく含まれ、各地でさまざまな遺跡が見つかっています。



「東京府及神奈川県境域変更二関スル件法律・御署名原本・明治二十六年・法律第十二号」（抜粋）

多摩地域の神奈川県から東京府への移管を決定した法律。1893（明治26年）年2月18日に衆議院に議案が提出され、2月28日に貴衆両院を通過、3月4日に法律第12号として交付され、4月1日には施行と、法案提出から2ヶ月も立たないうちに移管が実施された。
所蔵：国立公文書館

多摩ニュータウンと多摩

Tama New Town and Tama Area

当センターがあるのは多摩ニュータウン。もちろん多摩地域の一部です。多摩・八王子・町田・稲城の4市にまたがる広大な町で、多摩川以南の丘陵部に位置しています。本企画展ではあえて多摩ニュータウンの遺跡を取り上げていませんが、壁沿いの常設展示には多摩ニュータウン遺跡群からの出土品がズラリ。企画展のいわば延長戦として常設展もお楽しみいただけます。



本館常設展示の多摩ニュータウン出土縄文土器たち

さあ、多摩の遺跡を巡る旅に出発しよう！

ふちゅう
府中市

むさしだい

武蔵台遺跡

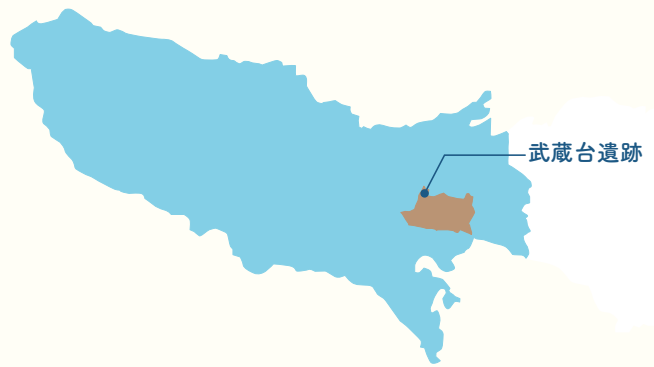
Musashidai Site, Fuchu

多摩川を望む台地の端に位置する武蔵台遺跡。

約 35,000-36,000 年前にさかのぼる石器たちは東京最古級の

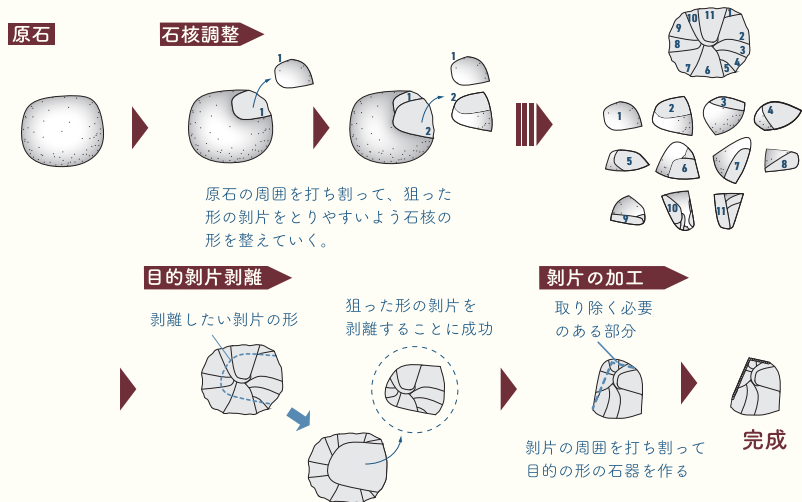
旧石器資料として知られています。石器群は加工の少ない不定形の剥片石器を主としながらも、後の時代の典型となる石刃製作と類似するような技術も見られます。東京や関東地方にとどまらず、日本列島の後期旧石器時代、ひいては人類史のはじまりを考える上で貴重な資料として著名です。

Located on the edge of an upland overlooking the Tama River, the Musashidai Site has yielded stone tools dating back approximately 35,000 to 36,000 years. These artifacts are recognized as among the oldest Paleolithic materials discovered in Tokyo. The assemblage consists mainly of minimally retouched, irregular flake tools. At the same time, it also shows techniques similar to blade production methods that would become typical in later periods. The Musashidai Site is widely regarded as an important source of evidence not only for Tokyo and the wider Kanto region, but also for understanding the Late Paleolithic period of the Japanese archipelago and, more broadly, the beginnings of human history in Japan.



? 石器製作とは?

日本列島の旧石器時代遺跡からはほぼ石器しか出土しないため、旧石器時代の研究には石器作りの知識が不可欠です。石器作りは、もとなる石のカタマリをその縁の部分から打ち割ることにより行います。打ち割って得た相対的に小さな破片を剥片、剥片が剥がされる元のカタマリを石核と呼び、剥片を得る工程全体は剥片剥離と呼ばれます。多くの場合、剥片の縁を更に細かく打ち割って形を整え、道具となる石器を作ります。



武蔵台遺跡の年代

Dating the Paleolithic Finds

旧石器時代の遺物の年代は、出土した層で決まります。展示の石器は関東ローム層のうち、立川ロームX層と呼ばれる部分から出土しました。関東地方で最も古い人類の痕跡は立川ロームX層および相当する層から発見されています。調査時の測定では35,000-36,000年前という年代が得られていますが、これは日本列島に大陸から新たにホモ・サピエンスの集団が渡来したとされる38,000年とも近く、武蔵台遺跡の研究上の重要性を示すものです。

? 関東ローム層

東京の台地部では50～100cmほど土を掘ると、鮮やかな黄～オレンジ色の土が現れます。これは関東ローム層と呼ばれ、富士山等の火山灰由来の土から成ると考えられていますが、旧石器時代の遺物はその上部、立川ロームと呼ばれる部分から見つかっています。立川ロームは中がさらに細分され、東京における旧石器時代の石器の新旧の決め方は、その石器が立川ロームの中のどの層から出土したか[※]を基本とします。
※上の層から出土したものは下の層から出たものより新しい



旧石器時代の土層断面と立川ロームX層からの遺物出土状況

写真提供：府中市郷土の森博物館

武蔵台遺跡の石器

Lithic tools of the site

出土した石器のなかには、後の時代に見られるような洗練されたものではないものの、石刃（縦長剥片）やその石核もいくつか見られます。しかし大半は近くの川原などでとったと思われる石材をランダムに打ち割って得た不定形な石のカケラ（剥片）に、最低限の加工しか施さないものばかりです。このような石器たちが、どのような人々によって作られたのか、そして後の時代の石器製作技術につながっていくのかどうかについては、現在でも結論が出ていません。

? 石刃・縦長剥片

丁寧に準備した石核から、縦長の剥片＝石刃を連続的にとり、それを用いて定型的な石器を作る方法は石刃技術と呼ばれ、後期旧石器時代に典型的な技術と考えられています。武蔵台遺跡の立川ロームX層からは縦長剥片・石刃と呼べるような剥片やその石核も出土していますが、形が整ったものは少なく、特定の石器器種との結びつきも見られないなど、少なくとも後の時期ほど洗練された石刃技術はなかったと考えられます。



立川ロームX層出土の代表的石器器種



(左上) 接合資料

遺跡から出た剥片や石核をつなぎ合わせていく＝接合することで、もとの石をどのような方向・順番で打ち割っていったかがわかります。原石に近い形に復元できる接合資料は持ち込んだ石をその場で打ち割ったことを示しており、おそらくは近隣の川原などでとれる石を持ってきたものと考えられます。

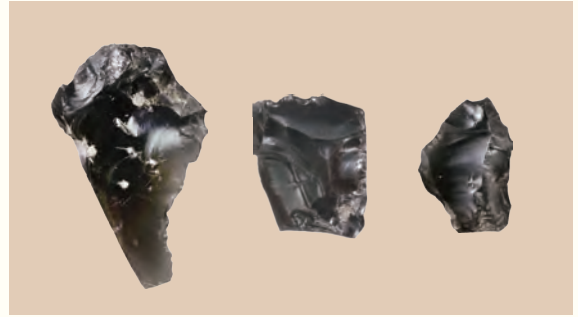
(右上) 縦長剥片剥離を含む接合資料

(右下) 縦長剥片



? 立川ロームX層出土の黒曜石製石器

黒曜石は採取できる場所が限られた典型的な遠隔地石材です。武蔵台遺跡の立川ロームX層でも黒曜石の石器が出土していますが、X層内でも上の部分(Xa層)から出土しているとされ、今回展示した他の石器類(Xb層出土)より少し後の時期に使われ始めたものではないかという考え方があります。関東地域の集団が遠隔地石材の利用を本格的にはじめたのがいつからかは、日本列島の人類史を考える上でも重要な論点ですが、結論はまだ出ていません。武蔵台遺跡立川ロームX層出土の黒曜石は1点を除いて全てが信州産で、本企画展では展示していませんが、残りの1点は神津島産です。

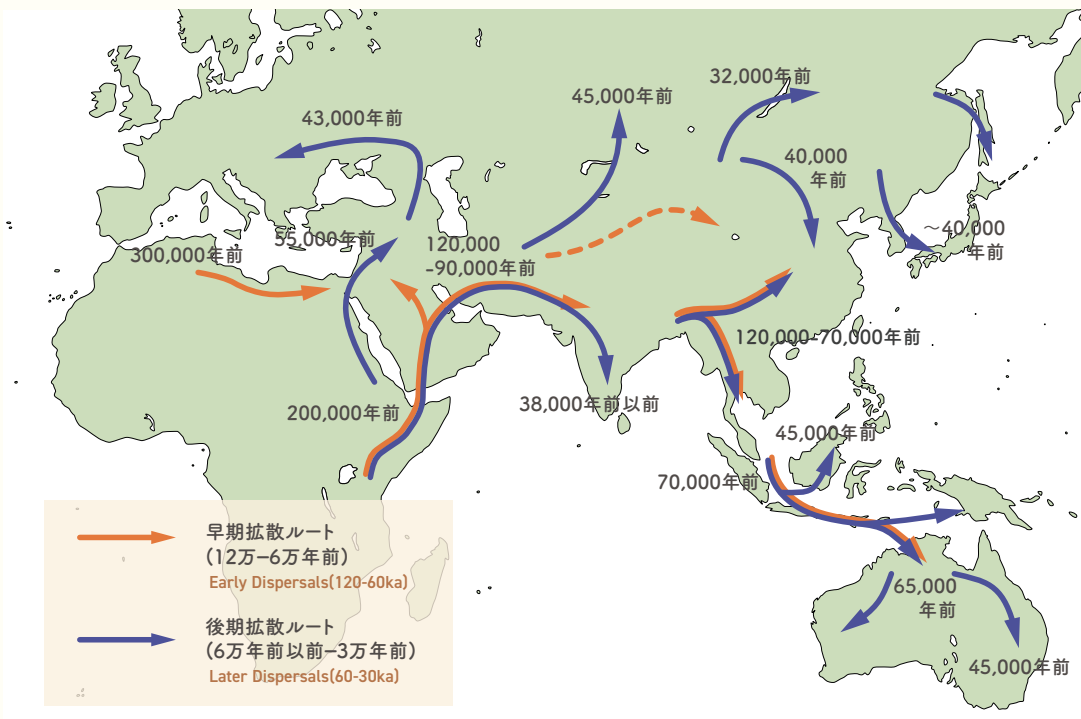


立川ロームX層出土の黒曜石製石器

日本列島の後期旧石器時代のはじまり

The Beginning of the Upper Paleolithic in Japan and Musashidai Site

日本列島の後期旧石器時代は約38,000年前の大陸からのホモ・サピエンス集団の渡来とともに始まるとされます。武蔵台の石器に見られる特徴が、新たな土地・環境に適応しようとする人々の試行錯誤の様を表しているのか、あるいは全く別の解釈がありうるのか、現在でも解決のついていない問題ですが、その豊富な資料は今後も列島の人類史のはじまりを考えようとする人にとって欠かせない情報源でありつづけることは間違いありません。



現在想定されている現生人類の拡散ルートの例

(Bae et al. 2017 "On the origin of modern humans: Asian perspectives" に掲載の図をトレース)

? 後期旧石器時代

ユーラシア大陸の旧石器時代は前期・中期・後期に分けられます。後期旧石器時代はもっとも新しい段階で、ネアンデルタールなどの様々な人類が共存していた中期以前とは異なり、ホモ・サピエンス(新人)のみが地球上で唯一の人類種となりました。石器技術の面でも、遠隔地の良質な石材の利用や、石刃技術に代表されるような丁寧な石核調整を伴う剥片剥離、丁寧に形を整えた定型的な石器が多くなるなどの特徴があるとされます。日本列島には中期旧石器時代以前には人類は来ておらず、列島の旧石器時代は後期旧石器の段階から始まるという考え方が主流となっています。

あきる野市

まえだこうち

前田耕地遺跡

都指定史跡・
重要文化財（出土品）

Maedakouchi Site, Akiruno

あきる野市の東部にある前田耕地遺跡は、縄文時代のはじめに

あたる草創期の出土品が特に知られています。最初期の土器や

動物骨・魚骨（鮭）などさまざまな遺物が出土しましたが、特に尖頭器せんとうきの製作に関わる資料を中心とした石器群は当時の石器製作技術などをよく表すものとして、重要文化財に指定されています。旧石器から縄文という時代の
転換期てんかんきに生きた人々の姿すがたを生き生きと伝えてくれる貴重な遺跡です。

The Maedakouchi Site, located in the eastern part of Akiruno City, is especially well known for artifacts from the earliest phase of the Jōmon period (the Incipient Jōmon). Excavations have uncovered a variety of items, including early pottery, animal bones, and fish remains (such as salmon). Among these, a collection of stone tools associated with the production of pointed implements—including flakes and other by-products from tool-making—is particularly significant. These tools, which clearly reflect the stone-working techniques of the time, have been designated an Important Cultural Property. This site offers a rare and vivid glimpse into the lives of people who lived during the transitional period from the Paleolithic to the Jomon era.

前田耕地遺跡の尖頭器

Points of Maedakouchi Site

前田耕地遺跡では2,000点以上という膨大な尖頭器せんとうきが出土しています。思い通りの形をつくることができずに製作を中止したもの（未成品）や途中で折れてしまったもの、製作の際に出る剥片類も多く出土しており、尖頭器作りの場所であったことがわかります。一方で、石器に残る衝撃剥離痕しょうげきはくりこんから、実際に刺突具しとつぐとして利用された可能性が高いものも含まれていることも明らかです。

尖頭器出土状況

画像中央付近に複数個の尖頭器が見える。

写真提供：東京都教育委員会



? 尖頭器

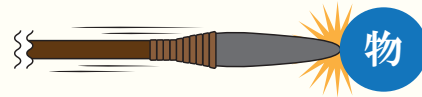
ここでは石の表裏両方から加工することで先端に「槍先」のような形状を作り出した石器を指しています。実際の用途が槍先のような刺突具（刺したり突いたりする道具）であったかどうかは必ずしも明らかではありませんが、後述のとおり、前田耕地遺跡の尖頭器には、刺突具として利用された可能性が高いものも含まれています。

尖頭器

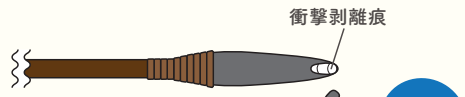
右2点は石器に残る剥離が粗かったり、もとの石の表面が広く残っているなど、おそらく何らかの理由から途中で製作を止めてしまった未成品と考えられます。



先端に衝撃剥離痕
のある尖頭器



① 石器がモノに当たり、衝撃がかかる

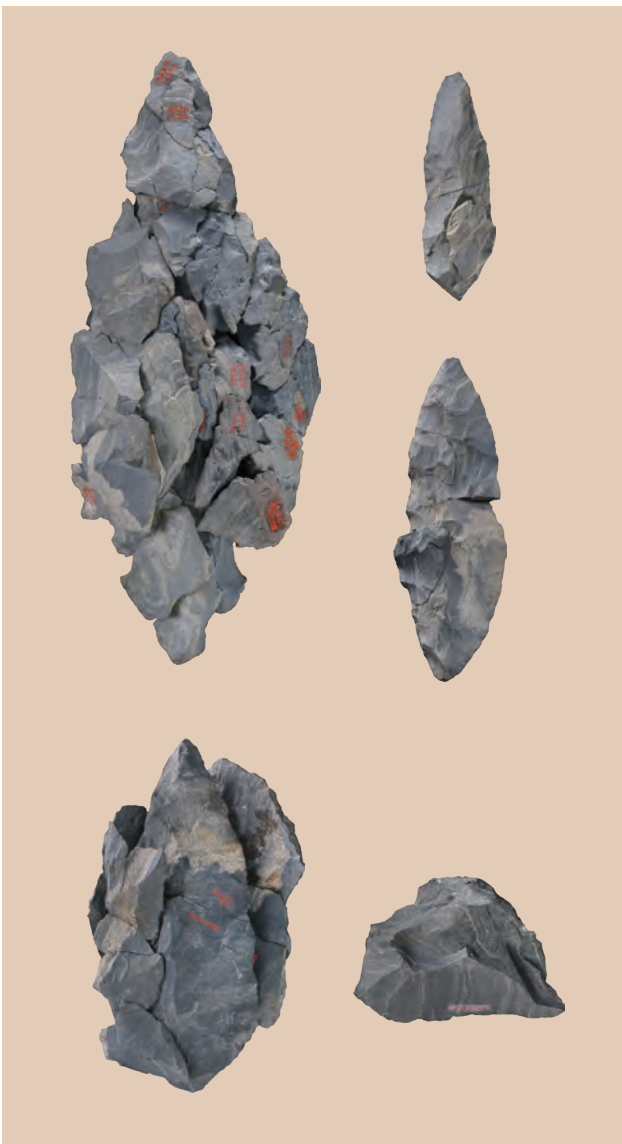


② 石器が割れて、特徴的な割れ痕が残る
= 衝撃剥離痕



? しょうげきはくり こん
衝撃剥離痕

過去と同じ方法で石器を作り、使ってみるという実験によって、槍先などとして投げたり突き刺したりした石器はその衝撃によって特徴的な割れ方をすることがわかっています。上の石器の先端にはそのような割れ口（衝撃剥離痕）が見られ、実際に狩りなどに使われたものであることを示します。



尖頭器以外の代表的な石器
(左) 石斧 (右上) 抉入削器 (右下) 搔器

接合資料等

上の尖頭器2点、下の削器はそれぞれの左にある接合資料と石質が類似し、同一の石に由来するものの可能性がある。

かんきょう 遺跡の立地環境

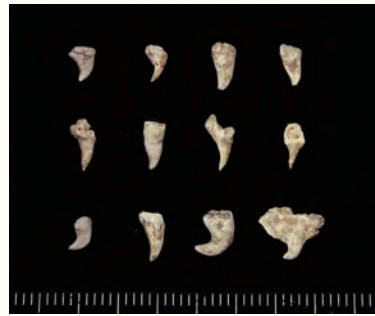
Geography around the site

遺跡は多摩川とその支流である秋川に挟まれた段丘上に立地しています。現在は川から少し離れたところにありますが、地形や地層の堆積状況等の検討から、縄文時代草創期には遺跡のすぐそばを川が流れていたと考えられています。増水の際には簡単に水没してしまうような場所でしたが、石器作りに使う石材の入手や鮭漁等にはとても便利な土地であったと考えられます。



縄文草創期の河川および氾濫原の推定範囲

増淵 2022「秋留台地における埋積谷と晩氷期の流水営力の増大」図2を参考に作成。周辺段丘面のうち、新井面以下の範囲に着色してある。多摩川および秋川の流路は現在のもの。
※国土地理院の地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) を利用して作図



鮭の歯

前田耕地遺跡では鮭の歯が大量に出土しています。サケ科以外の魚類の骨は一切見つからなかったこと、歯に比べて他の骨が極端に少ないことから、鮭の遡上する秋から冬にかけて集中的に漁獲し、頭を落とした上で身は外に持ち出していたのではないかと考えられます。魚類以外では、鹿や熊などの骨も見つかっています。

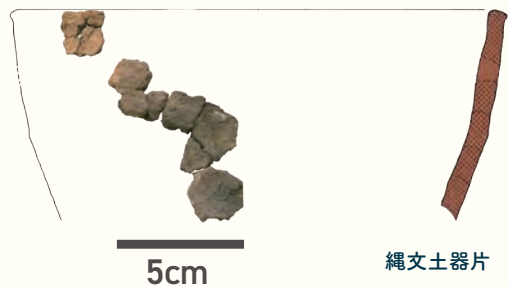
最後の旧石器人？最初の縄文人？

Between the Palaeolithic and the Jomon

ここでご紹介している前田耕地遺跡の出土品は約 15,000 年前、縄文時代草創期のものです。この時期は土器の出現後であることから草創期として縄文時代に含めていますが、**縄文的な生活**が本格化した後の時代に対して、狩猟と移動を繰り返す旧石器時代と変わらない暮らしが基本でした。大量の尖頭器と最初期の土器が共存する前田耕地遺跡には、そんな縄文時代草創期の人々の生活がよく表れています。

? 縄文的な生活

一般的に寒冷で気候の変動が激しかったとされる旧石器時代に対して縄文時代は温暖で比較的安定した気候が特徴とされます。温暖化によって食べられる木の実や山菜・イモ類などの植物性食料が増えたことを背景に、旧石器時代に比べて定住性も増しました。地球規模の温暖化が本格的に始まったのは約 12,000 年前で、ここに展示している資料が残されたのはまだ寒冷な時期だったことがわかっています。



5cm

縄文土器片

前田耕地遺跡の縄文時代草創期の景観復元図

周辺には、シラカバやトウヒなどに代表される寒冷な気候のもてみられる植生が広がっている。尖頭器の製作や土器の使用、鮭の調理などの様子も描かれている。



はちおうじ
八王子市

なめざか

滑坂遺跡

Namezaka Site, Hachioji



滑坂遺跡は丘陵地帯にあった縄文時代の集落遺跡です。

みなみ野シティ造成に伴う2.45haの大規模調査によって、滑坂山とも通称された半独立丘陵の頂上を取り巻く環状集落が完掘されました。見つかった89棟の竪穴住居跡は全て縄文時代中期に属し、500年以上にわたって人が住み続けたものと考えられています。造形美豊かな土器たちからは、当時の丘陵人たちの精神を感じることができるようです。

The Namezaka Site is a Jomon-period settlement site located on a hilly ridge. A large-scale excavation covering 2.45 hectares was conducted prior to extensive residential and commercial development in the area. This investigation completely uncovered a ring-shaped settlement encircling the summit of a semi-isolated hill once known locally as Namezaka-yama. Eighty-nine pit dwellings were discovered, all dating to the Middle Jomon period. The settlement is thought to have been inhabited for more than 500 years. The richly decorated pottery unearthed here invites us to imagine the spiritual world of the people who once lived on these hills.

? 縄文時代の時期区分

縄文時代はさらに6つに細分されています：

草創期（約15,500-11,500年前）

早期（約11,500-7,000年前）

前期（約7,000-5,500年前）

中期（約5,500-4,500年前）

後期（約4,500-3,300年前）

晩期（約3,300-2,500年前）

以上の区分は土器型式をもとに設定されたものです。

? 環状集落

縄文時代に見られた集落形態で、ドーナツ状・あるいはU字状に竪穴住居跡が並ぶものを指します。中央は墓域や祭祀の場として用いられていたと考えられています。ほとんどの場合、長年にわたって人々が住み続けた結果として形成されたもので、環状に住居が並んだようなムラの景観があったというわけではないと考えられています。滑坂遺跡は、典型的な環状集落の形状と異なり、細長い丘陵頂部の地形に沿う形で楕円形状を成しています。

多摩地域の縄文時代中期

The Middle Jomon Period in the Tama Region

縄文時代中期は概ね5,500年前から4,500年前にあたります。気温は現代と同じくらいで気候も比較的安定していたとされています。関東地方や中部高地（山梨・長野周辺）では縄文時代の中でもっとも遺跡数の多い時期で、大規模な遺跡も増加します。多摩地域でも下野谷遺跡（西東京市）や多摩ニュータウン No.72 遺跡のような大規模な集落跡が多く見つっていますが、滑坂遺跡もその一つと言えます。

滑坂遺跡のムラの姿

The Village at the Namezaka Site

89棟もの竪穴住居跡と聞くと沢山の人で賑わうムラの様子が直感的に想像されますが、見つかった土器の型式から個々の住居の年代を推定してみると、同時期に建っていた住居は多くても数棟程度であったと考えられています。ただ、この場所で長期にわたってムラが営まれていたことは確かです。この地は食料の確保などの点で縄文人にとって多くの恵みを与えてくれる場所だったということなのでしょう。



滑坂遺跡全景
竪穴住居が環状に並ぶ

まちだ
町田市

なすな原遺跡

Nasunahara Site, Machida

なすな原遺跡は恩田川おんだがわの谷を見下ろす台地の上にあった縄文時代草創期そうそうきから平安時代までの複合遺跡です。遺跡西端のNo.1地区では縄文時代後晩期こうばんきの集落跡が見つかり、数少ない南関東とうがいきの当該期に関する初期の調査例として、研究史上も重要な遺跡です。遺跡の存続期間ぞんぞくは1,000年以上にわたっていますが、本展示では晩期前半の出土品を展示しました。

The Nasunahara Site is a multi-period archaeological site on an upland overlooking the Onda River valley. It contains evidence dating from the Incipient Jomon period (beginning around 14,000 BCE) to the Heian period (794–1185 CE). A settlement from the Late to Final Jomon period was discovered at the western edge of the site. As one of the earliest excavated examples of this period in southern Kanto, it is important in the region's archaeological research history. Although the site was used for more than 1,000 years, this display highlights artifacts from the first half of the Final Jomon period.



多摩地域の縄文時代晩期

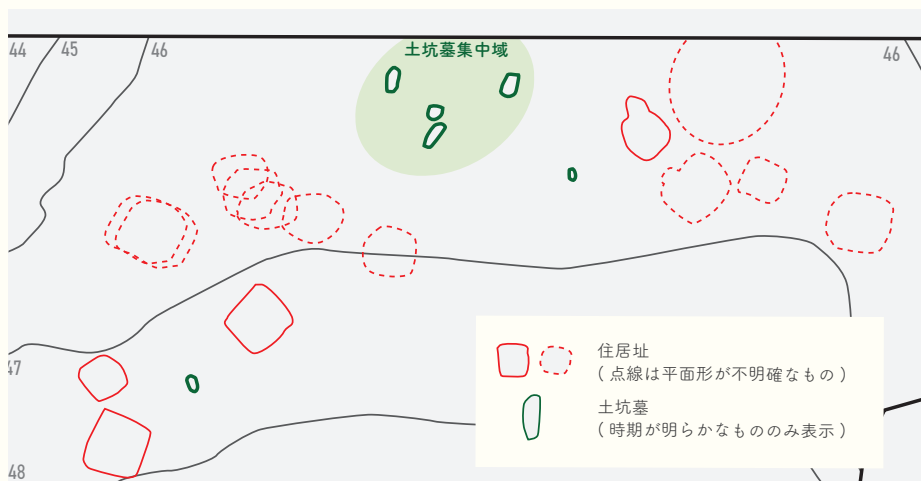
The Final Jomon Period in the Tama Region

関東地方では、縄文時代中期の遺跡は多く見つかる一方、晩期の遺跡は非常に少ないという傾向があります。例えば、当館のある多摩ニュータウン地域ちいきでは晩期の遺跡は一つも見つかりません。理由についてはまだはっきりとわかっていませんが、縄文時代後期以降に人々の生活のスタイル自体が大きく変わったことが考えられ、それが見つかった遺跡数などの状況じょうきょう はんえいに反映しているのかもしれない。

住居と墓域

Dwellings and a Burial Area

なすな原遺跡では、遺構の形状や出土品などから墓と推定される土坑すいてい（墓壇ぼこう）が多く見つかり、特にNo.1地区の北端には後期中葉以降、そのような墓壇が集中して作られる区域（墓域）が存在します。晩期前半の墓壇もその範囲内に築かれているものが多く、また住居もそれを東西はさに挟むような位置に築かれていることから、この区域を特別な場とみなす観念があったようです。



縄文時代晩期前半の住居と土坑墓の分布
土坑墓は時期等が確実なもののみを掲載しているが実際にはさらに多く見られる。

住居址
(点線は平面形が不明なもの)
土坑墓
(時期が明らかなもののみ表示)



? 土器型式

特定の地域・時期で見つかる土器のまとまりを土器型式と呼び、個々のグループにはその根拠となった遺跡の名前をとって「勝坂式」「加管利E式」といった名前がつけられています。個々の土器型式はこれまでの研究によって互いの新旧関係がわかっており、近年では理化学的な年代測定を利用することで、各型式の実年代もわかるようになってきました。

上：滑坂遺跡出土 縄文土器

全て深鉢。左から曾利式、勝坂式・勝坂式・阿玉台式

下：なすな原遺跡 縄文時代晩期前半出土品

土器（左4点：安行式、右4点：大洞式）、石剣、耳栓（耳飾、レプリカ。実物は市指定有形文化財）



まちだ
町田市

あやべはら

綾部原遺跡

Ayabehara Site, Machida

つるみがわを臨む丘陵に所在する綾部原遺跡では、弥生時代前期末

から中期初頭の土器がみつかりました。土器は、北向きの斜面に

掘られた穴の中に納められた状態でみつかったことから、再葬墓と考えられます。多摩地域ではこの時期の遺跡の発見例が少ないことから、当時の人々の活動を示す貴重な手がかりです。

綾部原遺跡

At the Ayabehara Site, on a hill overlooking the Tsurumi River, pottery dating from the end of the Early to the beginning of the Middle Yayoi period was discovered.

The pottery was placed in a pit dug into a north-facing slope, and the feature is interpreted as a secondary burial.

Because few sites from this period have been found in the Tama region, these remains provide valuable clues to human activity at that time.

? 再葬墓

遺体を一度土中に埋めたり、露天にさらして白骨化させてから再び埋葬する葬法で、多摩地域では縄文時代後期から弥生時代中期初頭に盛行します。綾部原遺跡の土器の中から骨は見つかっていませんが、類似する出土例から、再葬墓に関わる土器と考えられています。専用の土器を用いる地域もありますが、多摩地域の例では当時の人々が日常に使用した甕や壺を用いる例が多くを占めます。



展示品の内、壺と浅鉢は近接した土坑の中から出土しています。甕は土坑の中でバラバラになった状態で出土していますが、ほぼ完全な形に復元することができており、写真の様に土坑の中に納められていたと考えられます。

綾部原遺跡出土 弥生土器
左から 壺・甕・浅鉢

縄文をつけた弥生土器

Yayoi Pottery with Jomon Cord

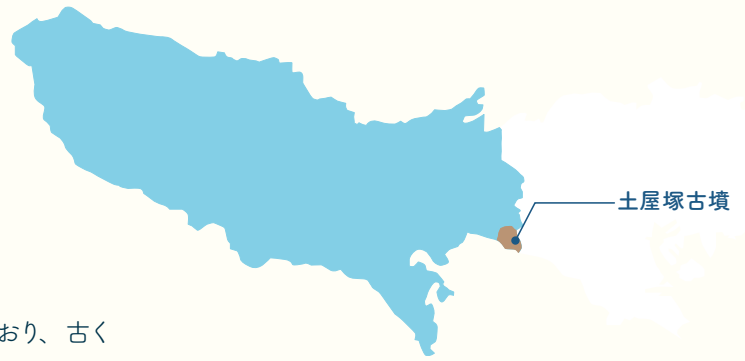
稲作が北部九州に伝わりクニが生まれた頃が多摩地域はまだ縄文時代で、多摩地域に弥生文化が流入するのは弥生時代前期も終わり頃になってからでした。展示の土器も形や成形技法は弥生文化のものですが、浅鉢には全体に縄文が施されるなど、縄文時代の影響が認められます。壺や甕にも東海地域と多摩地域の双方の特徴がみられます。

こまえ
狛江市

つち や づ か こ ふ ん

土屋塚古墳 市指定史跡

Tsuchiyaduka Kofun, Komae



土屋塚古墳

狛江市内には 70 基前後もの古墳が存在したと考えられており、古く

から「狛江百塚」とも呼ばれてきました。そのひとつである土屋塚古墳は、5世紀中葉に築造された直径約 35m の造り出し円墳です。被葬者の葬られた主体部は未調査ですが、周溝から、墳丘上に並べられていたであろう

円筒埴輪が 100 個体近く出土しました。この埴輪の製作技法から上毛野（群馬県）との結びつきが想定される

など、当時の社会情勢や、地域間の関係を推察する上での重要なヒントが得られています。現在、この古墳は市史跡に指定され、土屋塚古墳公園として整備されています。

It is believed that as many as around 70 burial mounds once stood in Komae City, long known as "Komae Hyakuzuka" ("the One Hundred Mounds of Komae").

The Tsuchiyazuka Kofun, one of these, is a circular mound with a projection, built in the mid-5th century and about 35 meters in diameter. Its main burial chamber has not yet been excavated. Nearly 100 cylindrical haniwa were recovered from the surrounding ditch; they were likely once arranged on top of the mound. The manufacturing techniques of these haniwa suggest connections with Kamitsukeno (present-day Gunma Prefecture), offering important clues to the social conditions of the time and interregional relations.

Today, the mound is designated as a municipal historic site and maintained as Tsuchiyazuka Kofun Park.

土屋塚古墳出土 円筒埴輪
市指定有形文化財

? 円筒埴輪

埴輪といえば、人物や馬、家などを表現した形象埴輪がお馴染みですが、ここに展示されている円筒埴輪は古墳の墳丘を取り巻くように設置されたもので、最も数多く出土する埴輪です。一見、形はシンプルですが、その特徴を詳しく観察すると、地域間の製作工人の関わりや、彼らを司った権力者たちの意向を窺う手掛かりを得ることができます。



上毛野はにわの里公園における円筒埴輪列の復元展示

多摩川流域の古墳

Kofun burial mounds along the Tama River

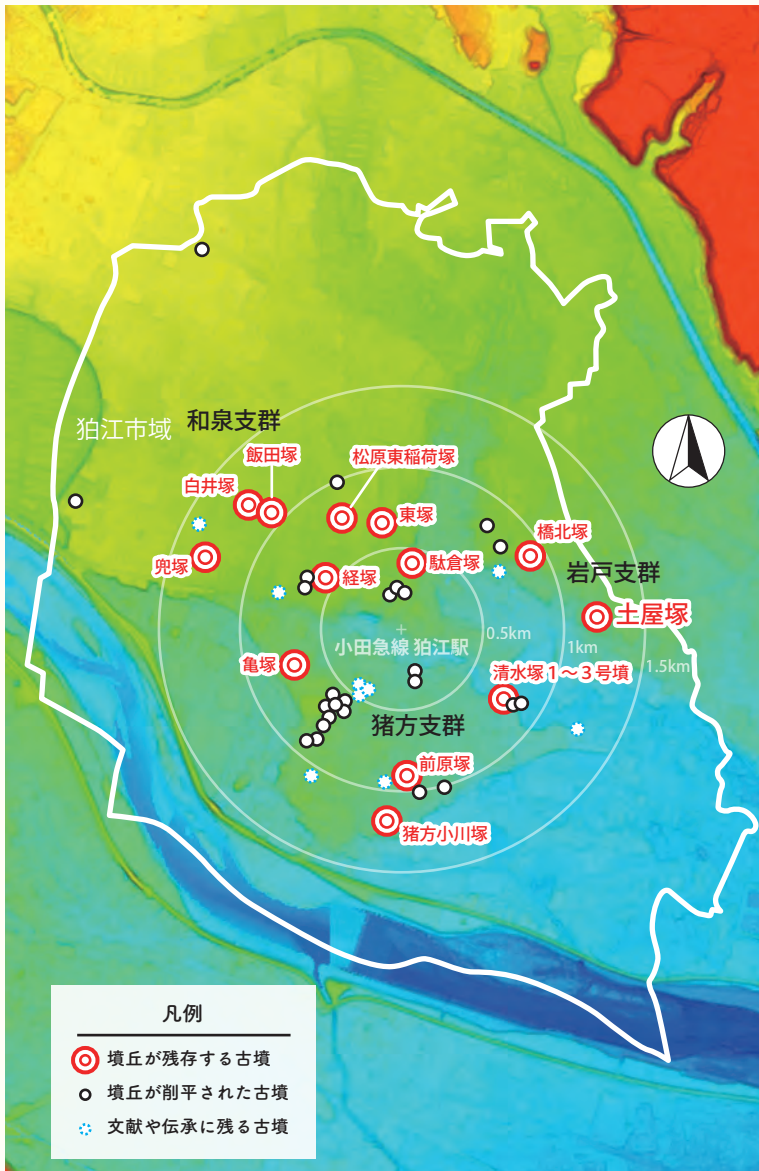
有力者の墓である古墳は、3世紀後半から大和地方（奈良県）を中心^{やまと}に作られ始め、やがて大和王権^{おうけん}の勢力拡大と共に全国各地へ広がっていきとされます。多摩川流域では、4世紀に砦^{かくだい}地域（世田谷区）より下流で造営が始まりますが、畿内^{きない}勢力の中心が大和から河内・和泉^{かわち いずみ}（大阪府）へ移る5世紀初頭頃には、中・上流域にも造られるようになりました。土屋塚古墳を含む狛江古墳群は、そのような流れの中で5世紀中頃から6世紀中頃にかけて築造された中流域の大古墳群です。



土屋塚古墳公園



(上) 多摩川流域の古墳分布図
(下) 狛江市内の古墳分布図



- 凡例
- ◎ 墳丘が残存する古墳
 - 墳丘が削平された古墳
 - ❄️ 文献や伝承に残る古墳



きない かみつけの 畿内・上毛野との関係

Connections with Kinai and Kamitsukeno

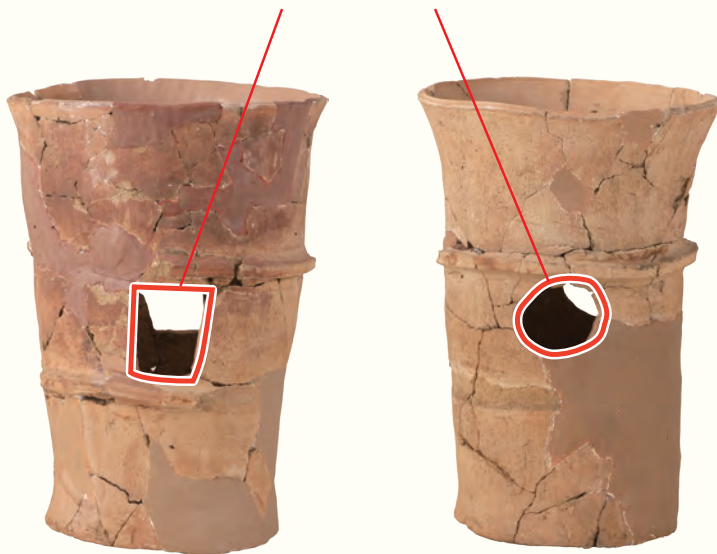
5世紀は畿内の新勢力と他地域の豪族との関係が全国的に再編される激動の時代です。多摩川中流域に出現した古墳群の中にも、この土屋塚古墳のように、河内で新たに創出された帆立貝形古墳や造出付円墳といった墳形が認められています。一方、展示の円筒埴輪には上毛野と同じ技法が用いられていますが、この上毛野も河内と深い関係があったことが知られています。多摩地域がこの時代の大きな流れにどのように組み込まれていたのか。それを知るための鍵のひとつを、これらの埴輪が握っています。

あな スカシ孔

Openings in the Side

円筒埴輪の側面にあいているスカシ孔は方形・三角形などから円形へと変遷するとされています。埴輪の導入が遅かった多摩川流域では、初めから円形が主流でした。ところが、土屋塚古墳でスカシ孔を確認できた埴輪は円形36、方形37と、方形がほぼ半数を占めています。

スカシ孔



方形

円形



内面に見られる製作痕

内面は段が積み重なったような見た目になっているが、この一段が巻き上げた粘土紐に相当する。平行に連続して並んでいる小さな凹みは粘土紐を押さえつけた指の跡。

ないめんゆびお 「内面指押さえ」技法

Pressing the Inner Joints by Hand

土屋塚古墳のすべての円筒埴輪の内面には、成形のために巻き上げた粘土紐の継ぎ目を指でつぶして埋める特徴的な技法が使われています。「内面指押さえ」と呼ばれるこの技法は、上毛野で始まり、下毛野や南武蔵に伝播したと考えられています。古い方形のスカシ孔が残存する状況も上毛野と一致することから、これらの埴輪には上毛野の製作集団が関与した可能性が想定されています。

くにたち
国立市

し け ん ざ い け

四軒在家遺跡

Shikenzake Site, Kunitachi



この遺跡は多摩川中流域にある青柳古墳群の一角にあり、7世紀前～中葉に造営されたと考えられる直径10～30m規模の円墳

10基が見つっています。墳丘はどれも後世の削平でほとんど失われていましたが、石室の床面は良好に残っており、副葬品も数多く出土しました。10基の古墳はわずか半世紀ほどの間に築造されたにも関わらず、石室の形態や副葬品の構成が異なっており、多摩地域の終末期古墳の様相を知る上で重要です。現在は、最も遺存状態のよかった1号墳の石室が四軒在家公園に移築保存されています。

This site forms part of the Aoyagi Kofun Cluster in the middle reaches of the Tama River. Ten circular burial mounds, 10 to 30 meters in diameter and dating to the early to mid-7th century, have been identified here. Although the earthen mounds were mostly leveled in later periods, the floors of the stone chambers remain well preserved, and numerous grave goods were recovered. Built within only about fifty years, the mounds nevertheless differ in chamber structure and grave goods, making the site important for understanding the final phase of kofun construction in the Tama region. The best-preserved chamber (Mound No. 1) has been relocated and is now preserved at Shikenzake Park.



四軒在家遺跡遠景（くにたち郷土文化館所蔵）

四軒在家遺跡1号墳の全景（左）と石室（右）
（くにたち郷土文化館所蔵）

四軒在家公園に移築保存されている1号墳の石室

墓を造営した集団

The Community that Built the Burial Mounds

この遺跡で見つかった古墳群の分布はさらに西側に広がる可能性があり、最大で20基程度の群集墳と想定されています。出土品や石室の形態から、造営期間は半世紀ほどと推定されています。古い古墳ほど墳丘規模が大きい傾向がありますが、新しい時期に前段階よりも大きな古墳がつくられた例もあり、地位的継承順などによる築造規模の規制があった可能性も考えられます。また、いくつかの古墳で副葬品が類似する傾向もあることから、古墳を造営した集団内の関係も非常に興味深い研究テーマです。

? 群集墳

小規模な古墳を狭い範囲に密集してつくるもので、古墳時代後期から終末期に盛んに造営されました。それまでの大形の古墳が、限られた一部の人のためのものだったのとは異なり、古墳を作ることのできる人の範囲が有力者の家族などにも広がったためと考えられています。

権威を示す副葬品 市指定有形文化財

Grave Goods Signifying Authority

被葬者を安置した石室には、直刀、金メッキを施した銅製の耳環（耳飾り）、ガラス製・石製の玉類（勾玉、丸玉、小玉、管玉、切子玉、棗玉、蜻蛉玉）というように、被葬者の地位を示す品（威信財）が数多く副葬されていました。特に畿内から供与された可能性がある銀象嵌の施された直刀は、多摩川左岸域では6例しか発見されておらず、群集墳の造営集団像を描く上で重要な資料です。



9号墳出土直刀
 上の直刀のハバキには
 銀象嵌が施されている



ハバキに施された銀象嵌

「象嵌」とは、素地に模様を彫って他の素材をはめこんだ装飾技法のことです。この直刀のハバキには、撚りをかけた細い銀線がはめこまれています。左の拡大写真で白っぽく見えている線状の模様の部分です。



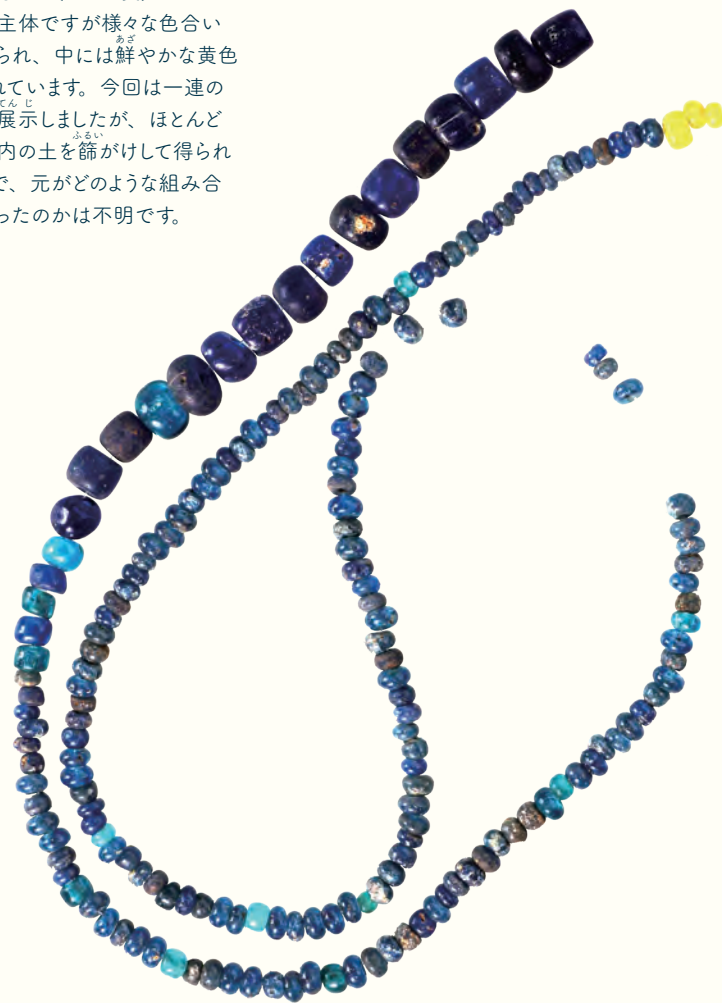
四軒在家遺跡出土
切子玉（水晶製）



四軒在家遺跡出土

丸玉・小玉（ガラス製）

青色が主体ですが様々な色合いが認められ、中には鮮やかな黄色も含まれています。今回は一連の状態でんじで展示しましたが、ほとんどは石室内の土を篩ふるいがけて得られたもので、元がどのような組み合わせだったのかは不明です。



水晶製切子玉（拡大）

多面体の玉を切子玉と呼び、多くの場合、六角柱の水晶を加工して作られます。これらを連ねていた糸は朽ちていましたが、玉の孔の内面に残る痕跡から、水銀朱で赤く染められていたことがわかります。



? **耳環・玉類の身に付け方**

出土した装身具をどのように身に付けたかについては、埴輪はにわに見られる表現が大きな参考になります。例えば右の人物埴輪は、耳環と玉類を身に付けた姿をしています。玉類は、頭飾り、首飾り、手飾り、足飾り、器物飾り（刀装具や馬具などの装飾）など、様々な装身具に用いられたことが知られています。

右写真：埴輪 椅子に腰掛ける女子
群馬県 塚廻り3号墳出土、6世紀中葉～後葉

国（文化庁）保管 重要文化財
文化庁及び群馬県立歴史博物館の許諾を得て掲載



ふちゅう
府中市

むさしこくふかんれん
**武蔵国府関連
遺跡**



武蔵国府
関連遺跡

Musashikokufu-kanren Site, Fuchu

武蔵国衙を中心とする武蔵国府関連遺跡は、市の中央を東西に貫くように広がっており、市域の約5分の1を占める広大な遺跡です。武蔵国の政治の中心である国庁、国司が住まう国司館、数千棟を超える建物群など、発見されている遺構の数も規模も周辺の一般集落遺跡を超える遺構が見つっています。国府内には政務に関わった官人たちも暮らしていました。ここでは特徴的な出土品から、彼らの暮らしの様子をご紹介します。

The archaeological sites associated with the Musashi provincial capital (Musashi kokufu) form an extensive complex stretching east to west across the present-day city of Fuchū, covering about one-fifth of the city's area. Excavations have revealed remains on a scale far surpassing those of ordinary contemporary settlements. These include the provincial government offices (kokuchō), the residence of the provincial governor (kokushi-kan), and traces of more than several thousand structures. The provincial capital was also home to the officials who conducted governmental affairs. Here, distinctive artifacts unearthed from the site reveal aspects of their daily lives.



国司が都から赴任した儀式を再現したジオラマ
国史跡 武蔵国府跡 国司館地区

? 国府

奈良時代から平安時代にかけて、日本各地の国（現在の県に近い単位）ごとに設けられた役所です。都から派遣された国司を中心に多くの役人が働いていました。律令（法律）にもとづいて政治や儀式を行ったり、戸籍を管理して税を集めるなど、朝廷の地方統治にとって重要な場所でした。

はってん
国府の器—国府発展期の器—

Pottery from the Musashi Provincial Capital

8世紀前葉頃の竪穴住居跡からまとも出土したものです。

盤状坏は、平底で背が低く、赤く彩色されているのが特徴で、内面には暗文と呼ばれる模様を伴うものもみられます。その影響を受けて在地の丸底坏にも暗文が施されるものがあられます。この時期の一般的な集落遺跡ではあまり出土しない須恵器も出土しています。



土師器坏に施された暗文
(拡大)

内面の中心から外側へ放射状に延びる筋状の文様。金属製の食器の光沢を模したものとされています。



(左上) 板状坏
(右上) 暗文土師器坏
(左下) 須恵器坏・蓋

ぶんぼうぐ 文房具—官人の仕事道具—

Writing Implements

下級官人の主な仕事は文書を書くこと。展示の硯も中央が摩耗しており、良く使い込まれていることがわかります。小型の平瓶は硯に水を注ぐ水差でしょうか。刀子も木簡の訂正や再利用のために表面を削る道具として、官人必携だったのでしょうか。

武蔵国府関連遺跡出土 文房具類

左上：水滴（水差） 右上：風字硯 左下：円面硯 右下：刀子



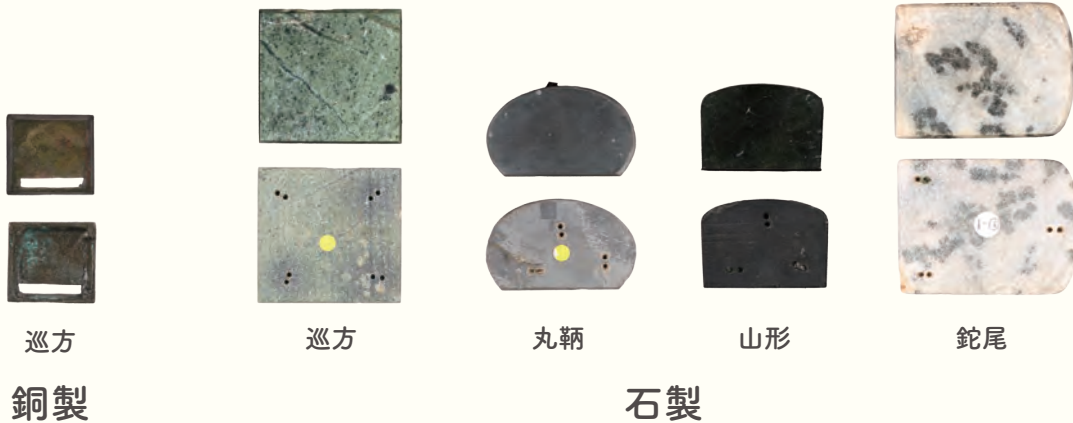
おびかざ 帯飾り—官位の証—

Belt Ornaments— Symbols of Official Rank

官人は身分によって定められた材料や色の飾りをつけた革帯を身につけていました。展示の様々な石製帯飾りは、一棟の建物跡から30点以上が出土した極めて特殊な例で、その理由は明らかになっていません。



まとめて出土した石製の帯飾り
写真提供：府中市教育委員会



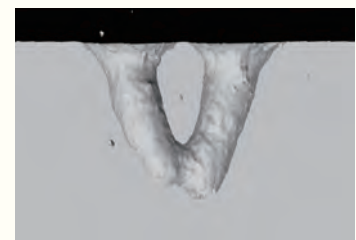
武蔵国府関連遺跡出土の帯飾り類

銅製のものは銅か（金偏に宀）・石製のものを石袴と呼び、それぞれを装着した帯をか帯・石帯と呼ぶ。形状によって巡方・丸柄・山形・鉤尾などの名称があり、前3者は帯の背中側に回る部分、鉤尾は剣先部分に取り付ける。石製のものの裏側には針金を使って帯にとりつけるための穴が見える。



帯飾りをつけた革帯の復元例（左）と装着例（右）

写真提供：霞会館記念学習院ミュージアム



石製帯飾り
取り付け用穴 CT 画像
上写真右側の白色鉤尾
背面の穴の一つ



武蔵国府関連遺跡出土 石製帯飾り類



はちおうじ
八王子市

はちおうじ じょうあと

八王子城跡 国指定史跡

Hachioji-jo ato, Hachioji

たか おさん 高尾山の北側、ふかざわやま 深沢山（通称：城山）の急峻な地形を利用して

築かれた山城です。1580年代半ばに、当時この地域を支配して

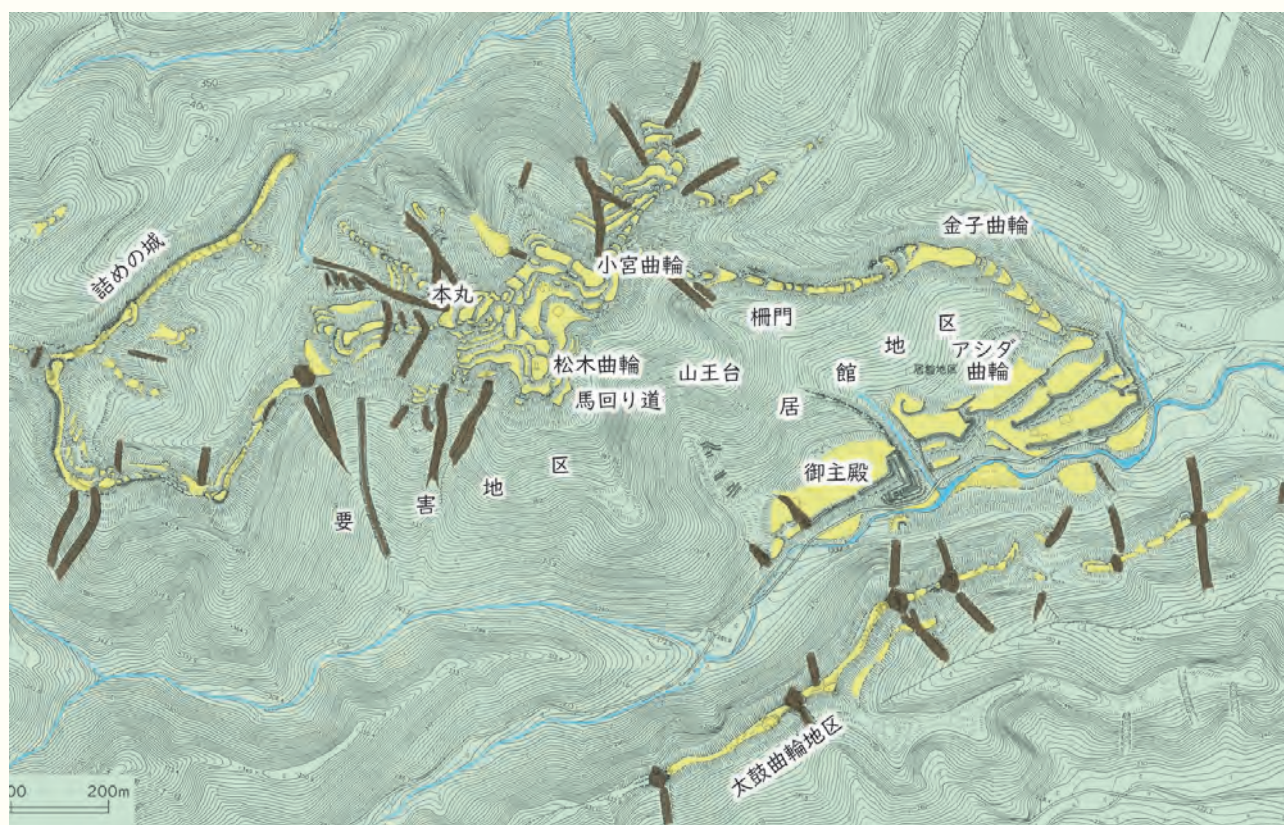
いた北条氏照によって築城されました。城主の政務や生活の場であった麓の御主殿地区では、大型の礎石建物跡や庭園跡が見つっています。築城時は難攻不落とうたわれた八王子城でしたが、豊臣秀吉の小田原征伐

（1590年）の際、城主氏照が不在のまま攻撃を受け、1日ともたずに落城したと伝わります。その後はあまり人の手が入らなかったことから、戦国末の遺構がよく遺されており、戦後間もない1951年に国の史跡に指定されました。

This mountain castle was built on the steep slopes of Mount Fukazawa (also known as Shiroyama), north of Mount Takao. It was constructed in the mid-1580s by Hōjō Ujiteru, the warlord who ruled this region at the time. At the foot of the mountain lies the Goshuden area, where the lord conducted official business and lived. Excavations have uncovered the remains of large stone-based buildings and a garden. Though said to be impregnable when completed, Hachioji Castle fell in 1590 during Toyotomi Hideyoshi's campaign against Odawara, reportedly in less than a day while Ujiteru was away. Because the site was left largely untouched after the battle, many late 16th-century remains survive. It was designated a National Historic Site of Japan in 1951.



八王子城



八王子城 縄張り図（施設配置図）

八王子城跡でみつっている遺構

曲輪……平坦に整地された部分。外周は石垣や土塁で区画し、建物や拠点などを作る施設。

土塁……土を盛って作る堤。土地の区画や防御用の遮蔽として利用する。

石垣……石を積み重ねて斜面や盛土の崩落を防ぐ施設。

堀……溝状に掘られた施設。土地の区画の他、尾根稜線を分断して進路を妨げたり、斜面に沿って平行に数条連ねることで敵の侵攻ルートを制限する等、目的によって様々な形態を持っていました。

八王子城跡の出土品—生活と戦—

Artifacts Unearthed at Hachioji Castle: Life and Warfare

出土品は、主に御主殿周辺でみつかっています。最も多いのが生活道具で、中国から運ばれた磁器皿などの食器類のほか、硯などの文房具もあります。一方、鎧の部品である小札、火縄銃の弾と鑄型、鉄製の鏃など戦にかかわるものも含まれており、戦国城館の多面的な性格を反映しています。これらの出土品は、築城から落城までの数年の間に持ち込まれたと考えられ、製品の年代を知る上でも貴重な資料です。



御主殿地区に残された礎石列

八王子城跡 各種出土品



ちょうつがい
蝶番



てつぞく
鉄鏃



小札



? 鑄型

大形の弾を鑄造するための鑄型です。2つ1組で使用するため、側面には両者を合わせるための目印があります。また、隅には溶かした金属を流し入れる湯口があります。この鑄型で作られる弾（43mm）は一般的な火縄銃の弾（12～13mm）よりはるかに大きいため、大筒（大口径の火縄銃）用の可能性が考えられます。

? 小札

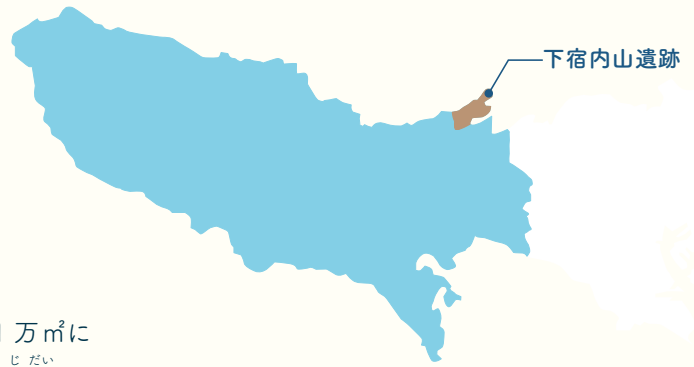
小札は鎧を構成する短冊状の小さな板のことで、表面の複数の孔に組紐を通し、連結することで、可動性のある鎧が出来ます。一つの鎧を作るには数百～数千枚の小札が必要となります。

きよせ
清瀬市

したじゅくうちやま

下宿内山遺跡

Shitajukuuchiya Site, Kiyose



清瀬市の下宿内山遺跡では 1976 年から数年にかけて 21 万㎡に
 およ 及び発掘が行われ、出土した大量の遺構・遺物から江戸時代の

下宿村の姿が明らかにされました。近世・近代を対象とした考古学がまだまだ本格的な発展の途上にある昭和 50
 年代に行われたこと、加えて、当時の政治・経済の中心地であった江戸ではなく農村地帯を大規模に調査したと
 いう点において、極めて先進的な発掘調査でした。本展示では主に江戸中期（18 世紀中から後半頃）を中心に
 した出土品を展示しました。

At the Shitajuku Uchiyama Site in Kiyose City, large-scale excavations were carried out from 1976 over several years, covering approximately 210,000 square meters. The numerous features and artifacts uncovered revealed the overall picture of Shitajuku Village during the Edo period (1603–1868). This was highly pioneering work conducted in the late 1970s and early 1980s, when archaeological research on Japan's early modern and modern periods was still developing. Instead of focusing on Edo, the urban center and seat of the shogunate (in what is now central Tokyo), it undertook a large-scale investigation of a rural village—an unusual approach at the time. The artifacts on display here mainly date to the middle Edo period, roughly from the mid to late 18th century.

発掘された農村生活

Unearthed Traces of Rural Life

下宿内山遺跡からは、囲炉裏の上に自在鉤等で吊るして使う平底の焙烙や、農作業の合間に鎌等を研ぐ持ち碇等、
 同時期の江戸ではあまり見られない、農村特有のモノが多く見つかっています。粗製の磁器碗を中心に皿といった
 食器の構成も、農村や下層町人に特徴的なものです。江戸で一般的になっていた堺産播鉢に加えて瀬戸美濃産
 播鉢が使われるのも、都市部とは異なったあり方と言えます。

下宿内山遺跡 出土品



平底焙烙

豆等を炒るのに使う。内耳が付いており、囲炉裏の上に吊るして
 使ったことがわかる。家の狭さや出火防止の目的から囲炉裏の
 少なかった江戸の町では、七輪などにかけて使う内耳なしの丸底
 焙烙が主に用いられた。

碗



皿





すりばら
播鉢

(左) 堺産 (右) 瀬戸美濃産

堺産は擦り目が全面にあり、釉薬が施されないのに対し、瀬戸美濃産では擦り目が疎らで、釉薬が施されている。江戸市中では18世紀前半から堺産が多くなるが、下宿村のような農村部では瀬戸・美濃産が後の時期まで残る。



もち碇

農作業中に、手で砥石を持って鎌等を研ぐ。都市部では砥石の方を置いて小刀・包丁等を研ぐのに使う置き砥が多い。



碗 (近代)

コバルト絵具の利用や型紙絵付など、明治以降の技法が使われているが、器形は江戸時代の流れを引き継いで、前ページに掲載した丸っこい碗と類似している。こうした形の碗が明治以降も引き続き使われるのは江戸近郊農村地帯の特徴。

都市とのつながり

Connections with Edo

焼きおつば びんぼうとっくり
焼塩壺の蓋や貧乏徳利等、都市的な遺物も少数ですが見つかり、江戸とのつながりが窺えます。江戸市中で作られたと考えられる灯明皿も多く出土しますが、夜間の内職作業が一般化した状況を表しているのかもしれない。



貧乏徳利

酒屋での小売用に用いられた貸出容器。通い徳利とも言う。次に来店する際には空になったものを持参する。主に江戸の町で一般的だった習慣。

焼塩壺の蓋



焼塩壺

(港区汐留遺跡出土)

粗塩を詰めて器ごと窯で焼いた高級食卓塩の容器。容器ごと売られ、宴席等で用いられた。



灯明皿

切り欠きのある環状の突起がついた受皿の上に油を満たした皿をのせ、縄状の灯心を浸して火をつけて照明にする。灯心から垂れた油は受皿中央に溜まる。



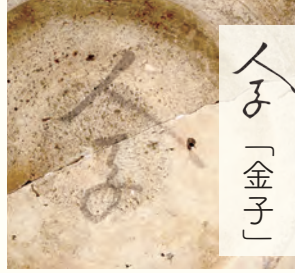
現代との連続性

Continuity with the Present

発掘調査によって明らかにされた屋敷地の分布は、1970年代の発掘直前の家屋敷の分布と概ね重なり、江戸時代に形成された村落景観が戦後に至るまで長く残っていたことが明らかになっています。「金子」姓の書かれた片口の出土した屋敷地からは、同じ姓の人物名の銘を持つ昭和の遺物も見つかっており、江戸期からの地域の連続性を象徴的に示しています。



片口



片口底面の「金子」銘



火鉢 (近代)
写真提供：清瀬市郷土博物館



火鉢底面の銘。
「昭和九年十月之末」
金子安五郎

下宿内山遺跡の近現代出土品

Continuity with the Present

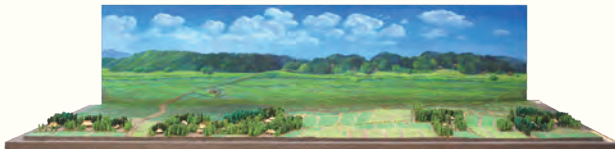
下宿内山遺跡では近代以降の陶磁器も多く見つかっています。ここに掲載したのは、昭和初期から戦後の高度経済成長期頃に製作されたと考えられる農業関係の銘のある湯呑碗です。これらは店舗等のノベルティとして製作・配布されたと考えられ、地域の歴史を物語る貴重な資料です。



昭和23年(1948)から使用された農協マーク。
平成4年(1992)からは現在のJAマークが使用されている。

左 「志木町 秋元肥料店」
右 「種専門店 朝霞駅前 種六商店」

いずれも埼玉県内にある肥料・種店の名が記されている。
見つかった碗には志木町の肥料商に関するものが多く、
両地域の関係の深さを物語る。



下宿内山遺跡復元模型
発掘調査の成果を基に18世紀中頃の農村景観を復元した
もの。景観の基本的な姿は昭和30年代まで変わらなかった。
写真提供：清瀬市郷土博物館

エピローグ

さらなる旅をはじめよう！

Begin Your Journey of Further Discovery

多摩の遺跡^{めぐ}を巡る旅 入門編、いかがだったでしょうか？

ここでご紹介^{しょうかい}できた遺跡はごく一部。

多摩地域^{ちいき}にはまだまだ遺跡がたくさんあり、発掘^{はくくつ}の成果は各地域の資料館等でも大切に保存^{ほぞん}・展示^{てんじ}されています。

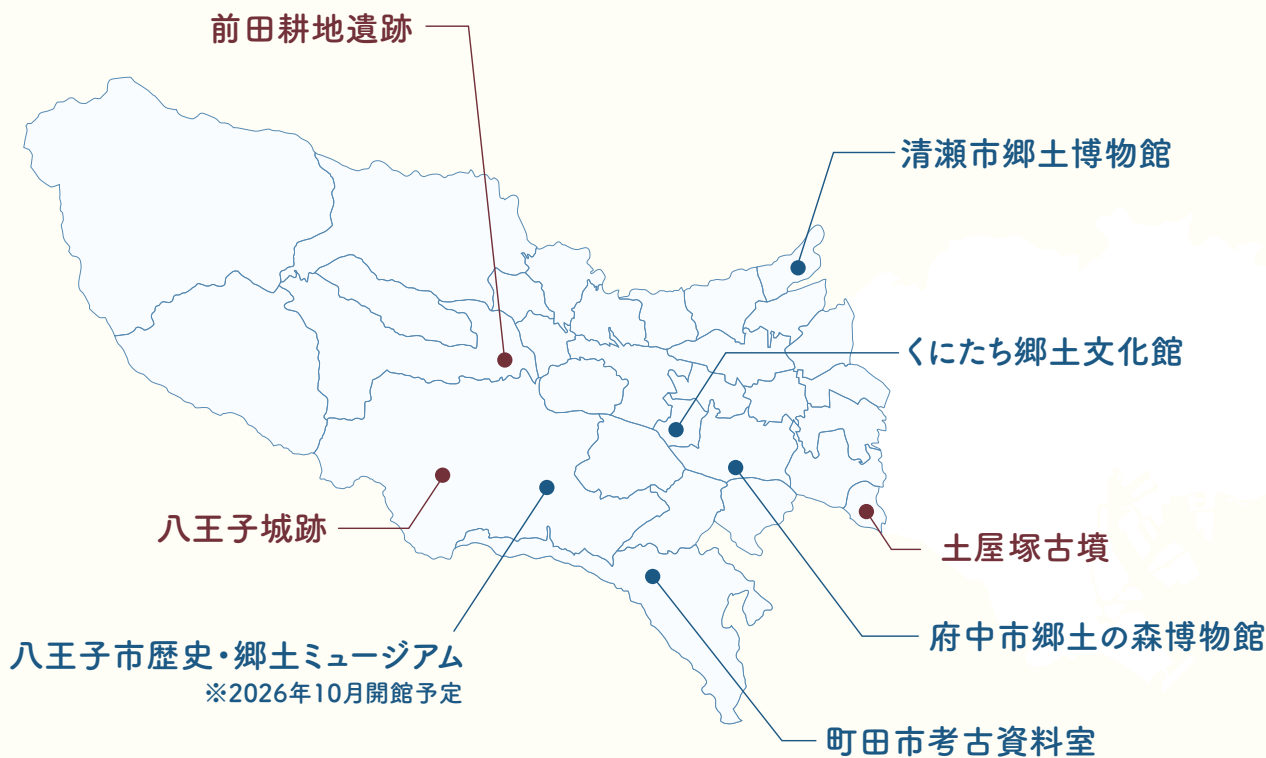
本展示で興味をもった方はぜひ自分だけの多摩の遺跡巡りの旅をはじめてみてください。

さらに多くの興味深い歴史があなたを待っているはずです。

How did you enjoy this introductory journey through the archaeological sites of Tama?

The sites presented here represent only a small portion of the region's rich archaeological heritage. Many more sites are scattered throughout the Tama area, and the discoveries made through excavations are carefully preserved and displayed at local history museums across the region.

If this exhibition has sparked your interest, we invite you to begin your own journey exploring the archaeological sites of Tama. Even more fascinating stories from the past are waiting to be discovered.



多摩地区の市町村の多くはそれぞれの郷土博物館・資料館を持っています^{きょうど}。館では遺跡からの出土品に加え、民俗資料等も展示され、地域の歴史を誰^{だれ}でも知ることができます。この地図では今回の展示にご協力いただいた館に加え、いくつかの遺跡の位置を示しています。

本展示にご協力いただいた皆様

東京都教育委員会 / 八王子市教育委員会 / 府中市教育委員会 / 府中市郷土の森博物館 /
町田市教育委員会 / 国立市教育委員会 / 狛江市教育委員会 / 清瀬市郷土博物館

霞会館記念学習院ミュージアム / かみつけの里博物館 / くにたち郷土文化館 / 群馬県立歴史博物館 /
田中潤 / 文化庁 / 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

展示資料をお貸しいただいた自治体の関連展示施設

八王子歴史・郷土ミュージアム

〒192-0904

東京都八王子市子安町三丁目26番1号

<https://sotonomori.jp/>

※2026年10月開館予定

くにたち郷土文化館

〒186-0011

東京都国立市谷保6231

<https://kuzaidan.or.jp/province/>

府中市郷土の森博物館

〒183-0026

東京都府中市南町6丁目32

<https://www.fuchu-cpf.or.jp/museum/>

清瀬市郷土博物館

〒204-0013

東京都清瀬市上清戸2-6-41

<https://museum-kiyose.jp/>

町田市考古資料室

〒194-0202

東京都町田市下小山田町4016

<https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/>

[bunka_geijutsu/cul/cul08.html](https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08.html)



展示関連地図 (Google マイマップ)

本企画展示でご紹介した遺跡に加えて、ご協力いただいた各館の場所をまとめた地図をWebで公開しています。遺跡巡りの旅にご活用ください。

令和8年度企画展示「入門！多摩の遺跡たち」 解説冊子

令和8年7月3日発行

編集・発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2

042-373-5296

<https://www.tomaibun.jp/>

印刷

明誠企画株式会社

